

BCS

BUILDING CONTRACTORS SOCIETY
PRIZE-WINNING WORKS

BCS賞受賞作品探訪記

5

第二六回受賞作品（一九八五年）

国立能楽堂

東京・千駄ヶ谷にある国立能楽堂は、我が国初の「国立」の能舞台である。流派を越えて我が国固有の伝統を継承し普及させることを目的としてつくられた。「能楽」は現在、重要無形文化財およびユネスコ無形文化遺産に指定されている。

流派を超えた能舞台

国立能楽堂は、千駄ヶ谷駅から線路沿い代々木駅方向に五分ほど歩き左手に少し入るとある。敷地の北隅の一角に正門があり、その奥敷地対角線上に独特なソリをも

つ屋根群が、高低差をもって幾重にも重なって見える。その優美な姿は竣工後約三十年経つ現在でも全く古さを感じさせない。国立能楽堂は、能楽の保存と普及を目的として一九八三年に開場した。それまで能楽は、世界の古

典演劇のなかでも極めて古い歴史を誇る舞台芸術で、国の重要無形文化財に指定されていたが、流儀や一門といった独特な風習があることから一般市民が鑑賞する機会が限られていた。また、後継者不足や資料の収集・展示を行う施設の必要性が認識されていた。そこで流派を超えた「国立」の能楽堂が計画されたのである。

議論を重ね、着工まで約四年

国立能楽堂の建設計画は、一九七六年芸術院会員で建築家の谷口吉郎氏が会長を務める設立準備調査会を文化庁が設置したのに始まる。そこで設計は伝統建築に

精通した建築家、故・大江宏氏が担当することとなった。その計画・立案に当たっては、設計者を含め能楽師、能楽研究者など能楽に関する様々な専門家が集まり極めて慎重に検討が重ねられた。特に能舞台の形式の決定には長い時間を要したという。そのため着工までに約四年の歳月が費やされた。その後、工事を管轄する建設省から発注が行われ、間・住友JVが受注し、一九八〇年五月に着工。約三年後の一九八三年八月に竣工した。建物は地下一階、地上二階建て。一階には公開部門の能舞台、見所（客席、広間、楽屋等の他、食堂、展示室、事務室がある。二階



全景。細かく分節された屋根が重なり合う。屋根はアルミ角材のルーバー。

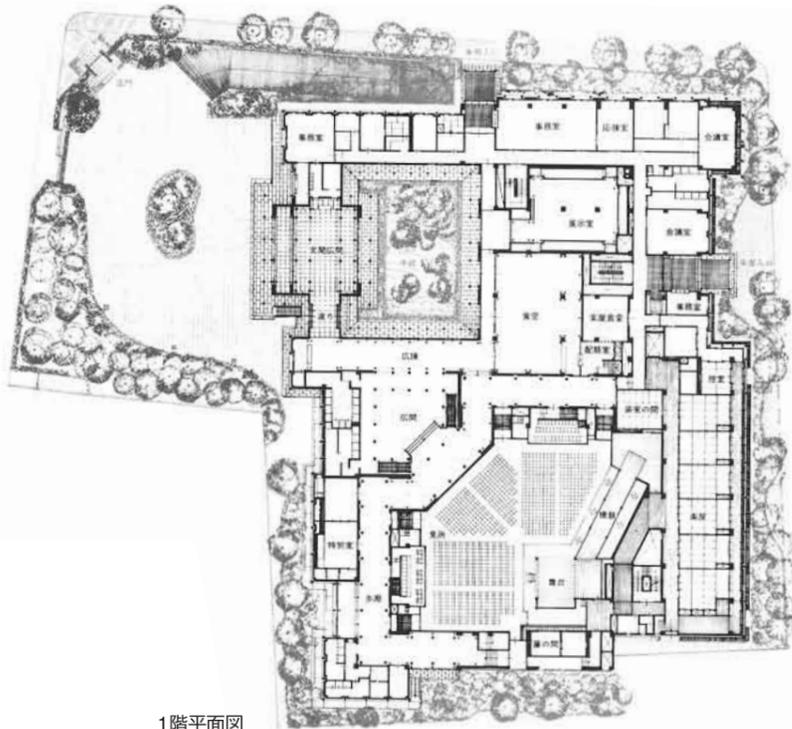
屋根の優美な曲線と比率

国立能楽堂の外観を最も特徴づけているのは屋根の構成である。「大江流」とも言われる優美なソリをもつ屋根群が、高低差をもつ

には研修用能舞台、講義室、稽古室、研修室など後継者の養成研修関係諸室があり、地下には図書閲覧室と資料収蔵庫がある。

工事概要

所在地：東京都渋谷区千駄ヶ谷4-18-1
建築主：文化庁
設計者：大江宏建築事務所
施工者：株式会社間組
住友建設株式会社
竣工：1983年8月31日
敷地面積：8,083㎡
建築面積：4,604㎡
延床面積：10,249㎡
階数：地下1階 地上2階 塔屋1階
構造：鉄筋コンクリート造 一部鉄骨造



1階平面図



玄関から渡りを見る。玄関は天井が高く円柱が格子状に並ぶ。渡りは狭くやや暗い。



中庭から玄関広間をみる。6本の耐候性鋼板の丸柱が方形屋根の化粧桁を受ける。

の欄間の二重スクリーンになっていて空間はほのかに明るい。そして荒々しい壁面をもつ薄暗い「歩廊」を通り、最後に広く暗い「見

内部空間はコンクリートの躯体と木造の造作の二層構成でつくられている。この内部の木造の造作は日本屈指の宮大工によって施工された。また木材も厳選されている。本舞台と橋掛りの床は尾州檜を使い、樹齢四百年無節で板目色合いの揃ったものを厳選した。そ

所」に達する。つまり外部から内部へ、溜りと流れの空間を繰り返しながら徐々に光を調整し、自然に人の心を能の幽玄なる世界へと導いている。

て幾重にも重なりあっている。大江氏は、建築を屋根から考えるところ。周辺環境に配慮して小さく分節し高さも抑えているのだが、この屋根の構成は内部の空間構造に対応し「空間相互間の関連性の比率」を表現しているという。

正門をくぐった時点からすでに能楽は始まっている。正門をくぐり前庭を通りぬけ「玄関」に入る。「玄関」の奥には「中庭」があり空間を明るく照らしている。この中庭を左手に見ながら比較的狭く天井の抑えられた縁側のような空間を進み「広間」に入る。「広間」上部の壁面は、大割の障子と堅格子



見所から能舞台を見る。舞台及び橋掛りの床には尾州檜が使われている。(写真提供：国立能楽堂)

能楽の世界に導く内部空間

この優美なソリは、大江宏氏がフリーハンドで描く曲線を事務所スタッフが図面に描き起こしたという。非常に微妙な勾配であったため、現場では屋根面の一つ一つ異なる勾配方向の照り曲線と軒先のソリ曲線に合わせて屋根を葺かなければならない。それを美しく仕上げるには、非常に高い精度が必要であった。そこで屋根を化粧面と水取り面の二層構造とし、化粧面をより精緻に造形でき、かつシャープに仕上がるように工夫した。化粧面には、三段階に色分けされた自然発色のアルミ押出型材水平ルーバーを取り付け、樋も屋根内に収めた。

建築主より

閼を低く、より多くの皆様に



独立行政法人日本芸術文化振興会
国立能楽堂 副部長
五十嵐 晃
Akira Igarashi

私は、国立能楽堂開場の二年前に当時の特殊法人国立劇場の能楽堂準備室に配属され、竣工後に行われる公演活動などの準備を進めていました。私が赴任した頃、工事はすでにコンクリートの躯体が打ち終わっていました。使い手の立場から、建物の細かな変更をお願いしたこともございました。それでも、設計者・施工者の方々はとても親切に対応してくださいました。

国立能楽堂には、能楽を後世に引き継いでいくために取り組んでいる三つの事業がございます。一つ目は公演事業です。公演は原則一回公演で、月に五回程度の自主公演を行っています。開場から現在まで一〇二万九〇〇〇人ものお客様が足を運んでくださいました。二つ目は養成事業です。ワキ方、囃子方、狂言方の三役の後継者育成に注力し、現在は二五名がプロとして活躍しています。三つ目は調査研究事業です。謡本、伝書、面、装束など能楽に関する資料の収集・保存・展示、自主公演の録音・録画などを行っています。これまで、中高生向けの鑑賞教室や、親子向けの夏休み公演の開催など、より多くの方が能楽を気軽に楽しめるよう、機会づくりに努めてきました。近年では、見所の座席に日本で初めてのパーソナルタイプの座席字幕表示システムを設置しています。是非、国立能楽堂に足をお運びいただければと思います。

設計者より

建物全体に一貫する機能と構造のバランス



有限会社大江建築アトリエ代表
大江新
Shin Ohe

私は三十代後半で、父・大江宏と共に計画に関わりました。施工前の設立準備調査会における構想と基本設計を担当していました。設立準備調査会は、谷口吉郎先生を委員長として二カ月に一回程度、約二年に渡って行われました。そこでは能楽師や能の研究者を含めた約二〇人の専門家が集まり慎重な議論が重ねられました。中でも一番時間を要したのは、能舞台脇の橋掛りの取り付き角度と長さです。研究者は古来の形式、橋掛りを長く急角度に戻そうと提案す

る。しかし演者からは長くて急角度だと演じづらいという意見がでる。このような議論が幾度となく重ねられた後、橋掛りは長さ一三メートル五〇センチ、幅二メートル五五センチ、斜角約二六度に決まりました。

設計で最も苦労した点は、コンクリートの外壁とその内側にある木架構との微妙な関係の調整です。建物の躯体を担うコンクリートと木造の造作の二層構造は、わずかな寸法の変更が全体に影響します。そのため、建物に対する要求を満たしつつも、柱の間隔、高さといった木架構の美しいプロポーションを整えることに大変苦労しました。

施工者の方々には、大変な緊張感のなか、すばらしい仕事をして頂きました。国立能楽堂には、日本の繊細な精神が宿っていると思います。今後もそのような精神が受け継がれ、また発展していくことを心から願っております。

他の場所には樹齢二千年を経た台湾檜が使われた。このため現場では檜の取り扱いにも細心の注意を払ったという。作業者は手袋と足袋を着けて作業し、また見学者が間違っても素手で触らないよう徹底管理した。このように高い緊張感の中で最高の技術が駆使されている。

歴史性と現代性の重層

能楽の中には今なお日本人の持つ「精霊信仰（アミニズム）」が表現されているという。また一方で能楽は、高度な修練をつみ、中世



広間。変五角形平面に13本の円柱が並ぶ。上部の障子と縦格子によるスクリーンの光に包まれている。

からの形式重視で継承しつつも、現代人にも分かるように演出が工夫されるといふ。つまり能楽は、歴史性と現代性の両面が表現される舞台芸術なのだ。

国立能楽堂にも、高い精神性と技術によってこの二面性が見事に表現されている。鉄筋コンクリートと木造作の対比、粗い石の割肌と優美な木地の対比、さまざまな事象が日本人の感性に重層的に訴えかけてくる。この重層する事象を受け入れる日本人の寛容な心が伝統を継承しまた新しく創るのである。



屋根工事の様子。優美な曲線をもつ屋根は鉄骨でかたちづくられている。

施工者より

国家プロジェクトに対する重圧とやりがい



元株式会社間組
小林 繁 Shigen Kobayashi

この工事で最もこだわった点は、材料の選定です。演者が舞う本舞台、橋掛りの床には極上の尾州檜を使っています。樹齢四百年、無節で板目、色合いの揃ったものを厳選し、さらにその中からよいものを選び取りました。数ミリに満たないわずかなヤニ壺でも、すぐにハネて、確かな品質のものだけを運び出しました。

柱、梁、階、檼、母屋や研修舞台などには、樹齢二千年を経た台湾檜を使用しました。こちらも私自身台湾に飛び、阿里山周辺の原

生林にまで分け入って調査を敢行。さらに切り出した後の貯木場の状況を確認し、製材した木々の選定にまで立ち会い、国産材に近い材質のものを選び出しました。

施工では、檜の取り扱いに細心の注意を払いました。手の脂がついてしまつとそれだけで大きなダメージになるので、作業者は手袋と足袋を着けて作業しました。また、見学者が素手で触らないよう徹底管理を行いました。とても緊張感のある現場だったと思います。

能楽堂、それも流儀を超えた唯一無比の国立の能楽堂の施工現場に作業所長として入ることになり、正直なところ、最初は相当な重圧と戸惑いがありました。しかし、このような歴史に残る建築物を手がけられるのは業界でも一握りです。一生に一度といつてよいプロジェクトに参加できたことをたいへん誇りに思っています。